



LA立教会だより

Volume 4, Issue 8

www.stpaul-la.com

March 2011



St. Paul's Rikkyo University
Alumni Club at Los Angeles

対談企画：立教生同士、もっとコミュニケーションしよう！

土屋あきのさん
(1993年社会学科卒／インダストリアル・デザイナー)

X

吉川真莉恵さん
(国際経営学科2年／CSU サンマルコス校留学中)

X

佐伯瞳さん
(国際経営学科3年／CSU サンマルコス校留学中)



対談のコンセプトは「もっとコミュニケーションしよう」。

LA立教会の校友の皆様、そして世界中の校友と在学生の方々同士、「立教」という媒介を通じて、もっとコミュニケーションできれば、きっと素晴らしいのではないかと。そんな思いで立ち上げた新しい企画が、「もっとコミュニケーション対談」です。

世代、職業、住む国を越えて、立教生同士、楽しくコミュニケーションをする機会を増やしてほしい。そして、新しい出会いの中で、新しいケミストリーが生まれてほしい。そんな思いを込めて、第1回の対談をスタートいたしました。

第一回は立教卒業後、クライスラーのカーデザイナーとして数々のコンセプトカーを発表、インダストリアルデザイナーとして世界的にご活躍されているLA立教会会員の土屋あきのさん、現在カリフォルニア州立大学サンマルコス校留学中の立教生吉川真莉恵さんと佐伯瞳さんの3人。偶然3人とも立教女学院出身。

「女性、成功、アメリカ」をテーマに、思う存分、楽しく「コミュニケーション」していただきました。

INSIDE THIS ISSUE

特集：対談企画 「立教生同士、もっとコミュニケーションしよう！」 土屋あきのさん(1993年社会学科卒) 吉川真莉恵さん(国際経営2年) 佐伯瞳さん(国際経営3年)	1
母校からの便り：「待望 LA 校友会訪問を終えて」 立教大学校友会会長 江草忠敬さん(1960年社会学科卒)	6
特集：「私の履歴書」 第1回寺島義雄さん(1964年経済学卒)－前編	8
LA立教会活動報告 「Italian Fusionのお料理教室と Wineを楽しむ会に参加して」 ターナー土門寛子さん(2000年英米文学科卒)	14
海外立教会から：「バンコク立教会の紹介」 バンコク立教会会長 山西陽三さん(1977年法学卒) 副会長 西島りえ子さん(1993年産関卒)	15
会長からのメッセージ： 「会員同志のもっとコミュニケーション」を目指して LA立教会会長 武井誠之さん(1969年経済学卒)	16

今回「もっとコミュニケーション」していただく皆さん。



土屋あきのさん：

立教女学院を経て、1993年社会学部社会学科卒。ワシントン大学留学を経て、アートセンターカレッジオブデザイン卒。クライスラーにカーデザイナーとして入社。自らの名前を冠した「クライスラー・アキノ」など斬新なコンセプトカーを次々と発表。現在、フリーランスのインダストリアルデザイナーとして活躍中。2006年6月28日 Newsweek 日本版創刊20周年特別企画「世界が認めた日本人女性100人」に選ばれた。



吉川真莉恵さん：

立教女学院を経て、経営学部国際経営学科2年在学中。現在カリフォルニア州立大学サンマルコス校留学中。1年生時にサークルでチアダンスに熱中。お菓子作り、旅行、映画鑑賞、写真撮影、街散策が趣味。



佐伯瞳さん：

立教女学院を経て、経営学部国際経営学科3年在学中。現在カリフォルニア州立大学サンマルコス校留学中。庶民吹奏楽団に所属。(現在留学のため休団中)ピアノ、カラオケ、インターネットが趣味。

土屋あきのさん(以下敬称略)「私は1993年社会学部社会学科卒業です。在学中に、バージニア州レキシントンのワシントン大学に2年間交換留学。その後、パサデナのアートセンターカレッジオブデザインに行き工業デザインを勉強。デトロイトのクライスラーで5年間勤めた後、カールスバッドのクライスラーのアドバンスデザインスタジオで、7年間コンセプトカーデザイナーとしてやりました。一年半ぐらい前にクライスラーを退職して、今は工業デザイナーのフリーとしてやっています。」

吉川真莉恵さん(以下敬称略)「私はあきのさんと同じ立教女学院を卒業して、立教大学に行きました。今は経営学部国際経営学科で勉強しています。学部間留学で、こちらに1年間だけ勉強しに来ました。今年の5月か6月に帰国になります。」

土屋「短いねえそうやって考えると」

吉川「カリフォルニア州立大学サンマルコス校に通っています。最初はESLで英語を勉強して、次のセメスターは大学の授業を全部取ることになっています。」

土屋「大学生同士のコンペで、日産のマーケティングプロジェクトで準優勝したんだって？」

吉川「授業の一環だったんです。」

土屋「どんな内容ですか？」

吉川「経営学部の中のビジネスリーダーシップという授業で、それに参加している人たち四人のグループを作って日産と提携して、新しい、今回はEV(エレクトリックカー)を若者に広げようというプロジェクトです。」

土屋「どんなアイデアだったの？」

吉川「若者にとってEVって、結構年輩の方が買うという率は高いんですけど、若者の普及率は低い。そこで、私は旅行と繋げて、EVと旅会社を提携してもらって、学生や若い人たちに安くEVを貸し出して使ってもらってEVの良さを知ってもらう、普及に使おうというプレゼンをしました。」

佐伯瞳さん(以下敬称略)「私も吉川さんと同じ立教女学院出身で、経営学部国際経営学科で、経歴は殆ど同じで、私は3年生です。もともと本当にアメリカが大好きで、人や生活を見ていくうちに、私にはアメリカが合うんじゃないかなと自分で思っていて、アメリカのプレゼンテーション力がすごく強いなと思っていたので、話す力も勉強をさせていただきたいなと思って来ました。前期はヒストリーとか映画とか、自分の興味のある分野を勉強させていただいたんですけど、後期はビジネスを取ろうと思っています。」

ひとりひとりのアメリカンドリーム。



土屋「私のアメリカに来たときの夢は、とにかく、ここで職を見つけてアメリカに住むということ。もともと社会学科なので、その関係の留学をしていましたが、たまたまアートのクラスをとって、その時に出会った先生から「君はアートの才能があるから、社会学科よりもアートに行ったらどうですか」と言われまして。」

佐伯「社会学からアートへ変更って、すごいですね」

土屋「アメリカっていうのはすごい自然体で、こうしなければいけないというのがないので、すっかりその気になって。私その時 23 歳か 24 歳で、今さらアート始めるっていうのも…と思ったんですけど、歳なんて関係ないって皆に励まされて、それでアートセンターに行く事にして、工業デザインをやろうと。」

土屋「その後クライスラーに入れていただいて、4 台コンセプトカーとしてオートショーで発表されて。そういった意味では、すごい自分の夢以上のことが達成できたなと思います。」

吉川「夢を実現できた秘訣ってありますか？」

土屋「それはやっぱり、夢を見続けてきたからかなと思います。これをしたいというものが見つかったからは、直進できたような気がします。」

吉川「これは一生懸命努力したというポイントはありますか？」

土屋「一番やっぱり努力した期間は、アートセンターでの 2 年間半ですね。あそこは、アートのブートキャンプと呼ばれるぐらいすごい厳しいんですよ。殆どの生徒が、もう高校なり大学なりでアート勉強してきた人ばかりで、私は社会学科だから、自分は他の生徒に比べて遅れてる、人の十倍やらなきゃと、4 時間睡眠で 2 年間やりました。とにかくここで工業デザイナーとして仕事もらうんだと、それしか考えていなかったから。」

佐伯「何才ごろのことでしたか？」

土屋「卒業して仕事始めたときに 28 歳でした。だからまあ、職というか専門を変える時期としては遅かったけれども後悔は全くしていない。自分がやりたいことを見つけるために、これから色々あると思うけど、一つのこと縛られないで、本当に自分に合うことは何なのかを探し続けてほしいと思う。二人(吉川さんと佐伯さん)はどんな夢を持ってアメリカに来たの？」

吉川「本当に私は、留学っていうのが高校生からの夢だったので、今は、ここに来て、集中して英語勉強してます。将来なりたいものとかは、まだはっきりしてないんです。」

土屋「将来つきたい職業とかあるの？」

吉川「まだ固まってなくて、目標というのが、英語を今とりあえずやるってことかな。みんな今の時代、英語喋れちゃうし。だから将来への土台をしっかりとるのが今の時期かなと。」

佐伯「私もやっぱり夢は漠然としていて、経営学部に入ったのも、就職の後に役立つんじゃないかと思っていたんですけど、こっちに来ると会社勤めの方より、起業されている方が活き活きしているなあと感じました。それで人によっては、全然英語は喋れないのに、例えば料理とかで活躍していたりする人もいて、スキルあつての英語力だなと。」

土屋「そうよね。スキルは大切よね。」

佐伯「私は、スキルあるかと言われても全くなくて、個人的に、昔から文字とか書く方が好きだったので、できれば文章力を使った仕事が出来たらなと最近思い出しました。」

吉川「あきのさんは、アメリカに住みたいと思って、女学院を卒業して、すぐにアメリカに飛ぼうとは思わなかったんですか？」

土屋「親を安心させつつ行きたかったんですよ。自分としても、絶対アメリカに住みたいというのは勿論あったけれど、高校のときに留学すると、遊びで終ったり、ホームステイだけで終ることもあるので、それよりもっと真剣にやりたかったんです。立教大学に行って、交換留学で向こうに行くのが一番良いというのは決めていましたね。」

佐伯「どうしてアメリカだったんですか？」

土屋「アメリカに行った事がなくて憧れですけど、才能とやる気さえあれば、そして、努力すれば何でも夢が叶うような国のように見えてました。(次ページに続く)

(前ページから続く)日本だと、これを勉強したからこの仕事とか、そう決まりきった道を行かなきゃいけないみたい感じがしていたんですね。」

吉川「アメリカは、それに比べて自由だ。」

土屋「そう。アメリカだったら広大な国だし、色んな人種もあるし、そういう意味で憧れていましたね。アメリカンドリームと言って、皆さん来るのがよくわかりますよ。やっぱりチャンスが得られやすいというか、自分の夢が叶いやすい。夢さえあれば、人々が手を広げて歓迎してくれるイメージ。実際にそういう部分もありました。」

吉川「本当は、実は、私イギリスに留学したかったんですが、TOEFLの点数が足りなくて、イギリスの学校は受けられなかったんですね。たまたま、アメリカのこの学校がいよって、教授の方が教えてくださったのでこちらに。イギリスじゃなくてこっちになったというのは、やっぱりこっち(アメリカ)に呼ばれてるのかな、そういう運命だったのかと。」

土屋「そうだよ。人生はそういうものです。(笑)」

日本人だからこそ、女性だからこそ、 できることがある。



土屋「女性で車外観のデザインをする人が少ない中、また日本人としてクライスラーに入って、大変だったかと言われるとそうとも限らない。日本人として、女性として自然に持ち合わせているものを、かえて個性として利点にしようと最初から考えていたんですね。」

吉川「職場でつらいこととかありませんでしたか？」

土屋「勿論、嫌味みたいなことを言う人当初いました。カチンときますけど、そういうときはジョークで返したりして。(右上に続く)

(右下から続く)又、相手の良いところをみてあげることで、相手との距離を狭めて状況を逆転させていった。日本人だから、女性だったから大変だったという、私は正直に言うて大変じゃなかったです。」

佐伯「では、あきのさんにとって一番の壁って何だったんですか？」

土屋「自分自身。私って、すごい自分に対する批判が強すぎる。例えば、コンペとかで負けるとひどく落ち込むし、勝ったら勝ったで、次の一步が踏み出しにくい。競争相手が世界中から選ばれているデザイナーだから、彼らに負けないように、そういう人と自分を比べてやっていくから、失望することも多くて、それが一番大変でした。」

吉川「私がやりたいことのひとつに、小さいときからケーキ作っていて、将来の夢としては、その方向も面白そうだなって思いますね。マーケティングも勉強してるので、どれか、いい形で将来に繋がられたらなと思います。」

佐伯「私は文章を書くのが好きなのですが、小説家とかそういう感じじゃなくて、どっちかというユーモア路線というか、ちょっと面白いことを書いたりすることが昔から好きだったんです。あきのさんの話聞いていて、クリエイティブな仕事って、達成感がすごいですよね。」

土屋「自分がデザインした車が発表されたときの達成感はずごくあるから、それがまたエネルギーになって次のプロジェクトに行く。人によって、自分はこれでいいんだと思うのも別に悪いことじゃないし。」

佐伯「若い人に送るメッセージはありますか？」

土屋「今は、すごく夢に向かって走るべき。若いし体力もあるし、この職に就いたらこうなるとか、そういうのをあまり考えないで、自分がやりたいことは何？一番幸せに感じられることは何だろうと考えてほしい。うまくいかなかったら、また別のことが繋がるかもしれないし、本当に人生って何か面白くてきてるって思いますよ。」

吉川「留学が人生を変えることもありますよね。」

土屋「そう。私の場合も、留学しているときにたまたま取ったアートのクラスで、自分はアートが好きだとわかって、それでこの道に入ったわけでしょ。だから、どこでどういうふうに人生が変わるかかわからないから、とりあえず、その時自分ができていることを夢中になってやると一番いいんじゃないかなと思います。」

お世話になった人。



土屋「私の人生を変えた人は、ワシントン大学のヘッドクエスト教授、アートヒストリーを教えておられた教授で、彼女が年齢なんて関係ない、自分が好きなことであれば、自分の夢に向かって前進するべきだと言ってくれたんですよ。」

佐伯「アートへの方向転換は大きな決断ですよ。」

土屋「でも、その時点で何かすっとしましたよ。せっかく社会学勉強してきたのに、今から他の勉強始めるのかと悶々としているときに言ってくれた一言です。」

吉川「これっていう一人はまだいないんですけど、大切な人は、立教女学院の友人です。私は彼女たちをととても尊敬していて、私も彼女たちに尊敬されるような人になりたいなと思います。彼女たちの手紙の一言一言に毎日励まされています。6人いるうち3人は、ハワイとカナダで勉強していて、手紙とか出し合っています。」

土屋「Emailじゃなくて手紙?」

吉川「手紙です。その方が届いた時に、開けて読むのがすごく嬉しいじゃないですか」

佐伯「私は、母がきっかけを作ってくれました。母は、家でやってる小さな塾で、英語の先生をしています。いつも「あなたも留学行ったらいいわね」とか「アメリカってこんなにすごいよ」って話してくれていました。」

吉川「あきのさんは、クライスラーで何か出会いはありましたか?」

土屋「私がクライスラーに入って4~5年目に入ってこられた、新しいビートルとか、最初のAudi TTとかをデザインされたフリーマン・トーマスさんですね。彼が、すごく私の才能を買って下さって。このスケッチはいいからもうちょっと直してみなさいとか。すごく自分の良いところを出してくれた上司です。」

吉川「友達が私に影響を与えていて、彼女たちがいなかったら日産のプロジェクトもうまくいかなかったと思うし、ここに来る決意もできなかったのかなと思いますね。」

佐伯「私、小学校の頃は真面目だったので、面白いことを考え付いても、それを人前で、あまり出そうとはしなかったんです。でも、立教女学院の子達って、なかなかユニークな子が多くて独特で、良い影響を受けてると思います。」

LA 立教会にひとこと。

吉川「留学生には、海外立教会、例えば、LAにはLA立教会があるっていうこと自体は知らされていないと思うんですね。情報があれば、興味があれば、返信返ってくると思うし、助けて欲しければ求めてくると思うし。」

佐伯「海外の立教会の方は、どれくらい「コミュニケーション」に本気なのだろうと。本気ならきつとうまくいくと思います。」

土屋「立教は、今私学の中でダントツだそうです。競争率二年続けてナンバーワンだって。卒業生としては、在校生には頑張ってる盛り上げてほしいな。やっぱり自分のホームだから、いつでも元気でいて欲しいから。」

吉川／佐伯「がんばります。」

みなさん対談お疲れさまでした！

母校からの便り「待望 LA 校友会訪問を終えて」

立教大学校友会会長
江草忠敬さん（1960 年社会卒）



現場に飛び込め

立教大学校友会会長に就任した際、真っ先に思ったのが、当時約延べ 15 万人（2011 年 3 月には 17 万人）の校友の方々が、それぞれの地域で校友会の活動の目標である校友間の親睦や大学へのバックアップが、どのようになされているのだろうか。活動の活力の源はすべてボランティア精神で行なわれているわけですが、その実態を知らないで、今まで経験した会社運営のシステムや理想論をぶっても、絵に描いた餅になるだろうし、協力を得ることも難しいと思いました。

まずは、現場に飛び込むことが大事と判断し、16 ブロック（185 箇所）にのぼる国内の地域訪問を始めました。

国内支部を訪問し始めた 1998 年の春、海外支部代表者会議で代表者皆さんの合意の下、立教会インターナショナルの旗揚げがございました。海外支部相互のコミュニケーションをより深め、支部のない地域の校友とのジョイント役を担うこと、各支部、或いは、グループで、立教大学学生のためのサポート活動を実行しやすくするための、折衝窓口になることなどの目的をもってスタートしました。25 の海外支部の活動に、一つの転換期が訪れたといえます。同時に、会長の海外支部訪問の要請が出されました。

海外地区訪問にチャレンジ

私が海外立教会支部を訪問するチャンスが生まれた背景には、海外支部の前向きな姿勢の構築と共に、「本は沈黙の外交官」という趣旨で活動している、(社)出版文化国際交流会の代表を務めていることが関係しております。

一部紹介させていただくと、フランクフルトで開催される世界最大の出版物展示会、個性豊かなフランス(パリ)、トルコ、出版物の輸出入最大のイギリス(ロンドン)、東欧を代表するポーランド(ワルシャワ)・ハンガリー(ブタペスト)、EU のへそといわれるリトアニア(ヴィリニユス)、北欧の出版国を代表するデンマーク、隣国の韓国、今や最大の出版点数を誇る中国(北京)、経済封鎖がなくなれば米国人が一番行きたい国キューバなどで開催されたブックフェアへの参加でした。

さらに、海外支部訪問を前向きに本格的に取り組む気持を持つきっかけは、女性パワーの見本ともいえる、ドイツ立教会磯洋子会長と、伝統を守りながら新しい活動にチャレンジする、ロサンゼルス立教会第 11 代孫恵美会長との出会いであったといえます。

ヤット米国本土へ

一年前の 2 月、待望のロサンゼルス立教会訪問が実現いたしました。きっかけは、キューバの首都ハバナで開催されたブックフェア開催時期と、立教大学硬式野球部、3 年に 1 回おこなわれる遠征合宿の日程がドンぴしゃり一致したことと、今年創立 50 周年を迎えられる蓄積したロサンゼルス立教会活動状況を肌で感じ取り、他の海外支部育成に活用させていただこうと思ったからでした。

滞在中孫会長、上井貴代子さん(亡きご主人のご両親と私の父母が戦前戦中戦後と長いお付き合いをしたご縁がありました)や、昨秋新会長になられた武井誠之さんなど、幹部の方々には観光もさることながら、日本人社会の現状や、生活の一端に触れるようなプランニングをして下さいました。

雨上がりで綺麗な夕日をバックにしたゲティ美術館、ウォルトディズニーコンサートホールでの演奏会、懐かしきハリウッドやUCLA 構内散歩など、大変楽しいひと時を過ごさせていただきました。紙面を通じ改めて感謝いたします。

また、一部同行した野球部の遠征にあたり、誠心誠意尽くされておられる坂本計洋副会長さんの活動ぶりは敬意を表するに値するものでありました。詳細は、「LA 立教だより」2010年9月版の「立教球児との12日間」と、2009年9月版の「大友良行〈特別寄稿〉立教野球部とのかかわり」に譲ります。なお、昨年秋に亡くなられた前ロサンゼルス立教会会長の水谷重雄先輩が投稿された2009年2月版の「立教大学野球部を迎えて」で、ロサンゼルス立教会が野球部遠征との関わりが詳細に書かれております。この経緯とロサンゼルス立教会活動との深いつながりを一読すると、「継続は力なり」の大切さがよくわかります。

しかし、「継続は力なり」を維持するには相当のエネルギーが必要だと思えます。一部の会員だけでは限界も出てくるでしょう。会員同志が十分理解し合った上で、会員全体の協力が不可欠ではないでしょうか。さらに、校友会として国内外共通の課題が、若手校友の参加が減少していること、女性会員の占める比率が上昇していることなどが、校友会活動に影響し始めております。ロサンゼルス校友会会員の構成にも変化が出始めると思えます。平成卒の占める比率も倍増し、支部の活動について様々な要望も出るのではないのでしょうか。

ロサンゼルス立教会は伝統もあり、所帯も大きいだけに、過去の活動実績を共通の財産として理解し合い、今後の運営の仕方には十分な意見交換を交えるなど、工夫が必要になってくると思えます。二年後には、学生の課外活動の一貫として海外経験をさせる野球部の遠征が押し迫っておりますだけに関心を持ちます。

運動部の現実と将来展望

立教大学の運動部に付いて若干触れたいと思えます。アスリート入試のお蔭で、上位の大学チームを食い一部リーグに進出、個人種目でも世界選手権やオリンピック候補に名が挙がる明るいニュースを耳にする機会が増えました。

しかし、総体的に昔のような結果を出すところまでは至っておりません。アスリート入試が今後継続されても、結果を生み出すには、部によりますが、後5から10年掛かるのではないかと見ております。約40年前の入試制度改革で選手が取れなくなったため、選手層が寸断され、継続性がなくなり、部の持つ伝統という財産の蓄積も失われた。他の部よりも早く立て直しをするには、現役で、少しでも好結果を生み出し、よい選手を迎え入れる環境作りが必要でしょう。

何でも大学の責任にすることでなく、弱くてもOB/OGの精神面、特に財政面でバックアップすることが必須であると思えます。私の勝手な考えですが、大学スポーツの代表格である硬式野球部が、六大学野球定席5位から脱出するには、5~6年計画で入部希望を技術テストで絞り込み、就職活動をねらって入部する選手の数を大幅に削減スリム化を計り、神宮のグラウンドで戦うことを目指す人材を作り上げる必要があると思っております。

出会いを大切に



人生の中で、人との出会いの大切さはご存知のとおりです。4年間の立教大学生活は人生の中でわずかな時間でしか有りません。しかし、そこでの教授や友人との出会い、部活動を通じての先輩との出会いが、自分の一生に与える影響の大きさは計り知れません。卒業後においても、母校への思い、母校の誇りをもって先輩、後輩方が出会い、それもまた己の成長に役立っているのではないのでしょうか。

このように、縦糸横糸が織り成すすばらしい出会いの場が校友会の集いだと思います。私自身、4年近く各地を回り多くの方々と出会いました。会社組織では味わう事の出来ない多くのことを学びました。このような幸せな人生を得た事に感謝しなければならないと思っております。

これからも、「校友同士の手を結ぶ数が増えれば校友の輪は広がる」をモットーに、微力ながら校友会発展に寄与したいと考えております。

会員の素顔に迫る！エッセイ「私の履歴書」

LA 立教会の会員の、ひとりひとりの人生をエッセイで語っていただく、「私の履歴書」。会員の皆様同士がもっとお互いを深く知り合っていて、コミュニケーションを増やす機会になればとスタートいたします。第一回は山洋電気アメリカ上級役員の寺島義雄さんです。今号はその前編を掲載いたします。

第 1 回(前編)

寺島義雄さん(1964 年経済卒)

1941 年 3 月、東京・武蔵野市吉祥寺生まれ。1964 年立教大学経済学部卒業。山岳部主将。サンフランシスコ州立大学・大学院に留学。週刊ポストのフリーランス記者、兼松江商メキシコ。その後ロサンゼルスで KEYMARC 社を設立。1995 年山洋電気アメリカを合併で設立。現在に至る。



平素、LA 立教会の皆様にはご無沙汰ばかりで申し訳なく思っている矢先、武井会長から、「プロフィール記事」を申し付けられ、戸惑いを感じましたが、「第 1 号」と聞くと闘志がわいてきてお受けしました。

何から書けば良いか迷いましたが、私は元「週刊ポスト」の記者、編集部で学んだ手法で行くことにしました。週刊誌手法とは記事の中身はともあれ、リードの部分で読者の興味をひきつける、というやり方です。体験済みですよ！

さて、私の人生で読者に“これは面白そうだ”と思っていた部分は何処か？大いに悩むところですが、普段皆様が知らない立教大学山岳部関連を中心に考えました。

<ヒマラヤ遠征>

1973 年は立教大学創立 50 年。建学 50 周年を記念して我々、山岳部はヒマラヤ遠征を計画。いつも金欠の山岳部にとって“建学 50 周年”という願ってもない名目を持った年で(つまり寄付が集まりやすい)、はたして大学当局、OB・OG 諸氏、そして毎日新聞社が後援に名乗りを上げてくれた。目指すはネパールの東端に位置するカンパチェン峰(7,903m)。“格好良い志向”が強い立教、一番ミーハーとは縁が遠い山岳部でさえ「未踏峰のなかで最高峰」のイメージに憧れたのだ。

ヒマラヤ遠征は 5 月に登頂を目指すプレモンスーンと、我々が目指した 10 月のポストモンスーンに限られるが、(夏はモンスーンの大雨でヒマラヤは吹雪の毎日)年初からネパール政府に申請してあった登山許可がなかなか届かず、全員が焦り始めた。

「寺島君、君は暇なんだから交渉に行って来い」隊長の一言で(ご存知のように先輩の一言は絶対命令、記者だって忙しいのに…)私はカトマンズに飛んだ。交渉は難航したもの結果オーライ。「わかった許可は出そう、書類作成に二週間かかるが安心してくれ」ネパール外務省のお偉方をカトマンズにある「レストラン TOKYO」に連れ出して、お墨付きを貰ったのだ。

余談だが、この掘っ立て小屋みたいな「TOKYO」のオーナーは立教テニス部出身で本人曰く、「訳ありの人生をネパールで送っている」理由は超のつく「美人をカトマンズに拉致？」後は黙して語らずだったが、ヤクザの親分を相手に体を張っている立教ボーイがネパールに居るのには感激したものだ。

8 月末日、私はビラトナガールという村で雇った 200 人のポーター、シェルパ 10 名、隊員 7 名で構成される先発隊の隊長としてキャラバンを開始した。ベースキャンプまで 25 日間という気の遠くなる道程は、ヒルが吸い付く密林、氷河が溶けて流れる溪谷やきつい登りの尾根筋を越える毎日だった。

或る日、私が吊橋を渡った直後、豪音とともに悲鳴が聞こえた。何と真新しい吊橋がぶつ切れ 20 メートルもの谷底にポーターが墜落したのだ。

「怪我の具合は？シェルパはどうした？」「どうもウンチに行っていたらしい」我々もちゃんと注意をしていて、吊橋に乗る場所にシェルパを配置していた。ポーターは 25 キロの荷を背負っているから、渡るのは一度に一人という取り決めていたのに、シェルパがいない隙に 3 人のポーターが吊橋に乗ったのだ。「糞？」シェルパのために 1 人が死に、2 人が重傷を負ってしまった。大失態だ。

遠征隊には必ず政府からリエゾン・オフィサーが配属される。我が隊のリエゾンはグルンという名のデブで好感度の低い奴だったが、交渉では凄腕を発揮した。結果、亡くなったポーターのお母さん、村長、そしてグルンのそれぞれに 50 ドルが支払われた。吊橋の賠償金ゼロ、合計 150 ドルで決着がついた。若い隊員が「何でグルンが貰うんだ」と怒ったが、我々は現地の習慣に口ははさめない。ただ、ホッとしたのはその当時の 50 ドルはヒマラヤの山中では三年分の現金収入に当たることを知った時だ。

9 月中旬、我々は 4,500m 地点にベースキャンプを建設、5,200m の前進拠点へ約 1 トンに及ぶ登山用具と食料の荷上げを開始した。酒井隊長を初めとする本隊が到着すると本格的な登攀が開始される。第 3 キャンプは 5,700m 地点、そしてアタックキャンプとなる第 4 キャンプを 6,400m 地点に設営した。私は先頭を切ってこの第 4 キャンプに乗りこんだが、高山病にやられ頭を抱えて寝たきり状態、そして私はヒマラヤの恐ろしさを体験することになる。

荒れ狂った猛吹雪は止むことを知らず、食料・燃料も残り少なくなっていった。ベースキャンプにいる隊長から撤退命令が出たのは、テント近くで雪崩が起こり 30 センチほども沈んだ時だ。行動を開始した我々は、何処をどう下ってゆくか見当もつかぬくらい山は変わっていた。登攀時につけた赤旗や安全ロープは雪崩と強風に飛ばされ、まさに吹雪の中の彷徨だった。だが、シェルパは凄い。慌てず迷わず我々を護ってくれた。彼らがいなかったら、私は今もヒマラヤ山中で凍っていること間違いがない。

ヒマラヤ登山の場合、下のキャンプの役割は上部キャンプのサポートにある。我々も第 3 キャンプの連中がてっきり迎えに来てくれるものと思ったが、彼らにはそんな余裕が全くなかった。というのも、第 3 キャンプは大きな崖の下部、猫の額みみたいな平坦地に設けたので、雪崩が崖の両サイドに頻繁に発生。隊員達は左手に懐中電灯、右にはナイフを握って、テントが雪崩に埋められても脱出できる態勢で 3 晩を過ごしたため、第 4 キャンプの支援どころか自らの脱出に命がけだったのだ。

我々が無事に第 2 キャンプに帰還できたのは僥倖だった。ところが、、、である。絶対安全のはずの第 2 キャンプさえ遠くの稜線からの大雪崩で危険状態、全員でベースキャンプに降りる事態になった。普段は 3 時間で駆け下りる距離だが、我々はヒマラヤを甘く観すぎている。「災難は心の不用意時に起こる」という格言を体験することになる。

4 日間の猛吹雪で積雪量は人間一人が埋まってしまうほどだった。10 名のシェルパが交代でラッセルするが遅遅として進まない。後方にいる私達は動くに動けず、暖かく湿った雪で雪だるま状態で日没、遂にビバーク(不時露営)となった。私が「山をなめた」といったのは、3 時間で着く、という甘い判断で高所用防寒具は置き去り、普段は持ち歩く非常食も持参しなかったことだ。新雪のため雪洞を掘ることもできないまま、雪の中に座り込んで夜を明かす派目になった。



「吹雪の中で夜を明かす時、眠ってはいけない」は登山のイロハだ。だが、現実とは違う。私や仲間はずちに眠りこんだ。シェルパなどは大いびきをかいて幸せそうだった。寒くて目が覚める。ひと時震えとまた眠りに落ちる。これを繰り返すうちに体温が下り、やがて永遠の眠りが来る。これが凍死だ。私は夢を見ていた。このくだりは「眉唾」と思わず読んでください。マッキンリー冬季単独初登攀を達成した直後に行方を絶った植村直己が話しかけてきたのだ。

「オイ、寺島、眠るな。俺の方がもっと寒い。いいか、眠るなよ！」植村とは明治、立教とは大学は違うが同期、日本山岳会学生部の集まりで山を語り合う仲間だった。不思議な感覚で覚醒した私は眠気を克服して夜明けを迎えることができた。しかし、今にして思う。もし、あの夜モンスーンが明けて凍った風が吹いたら、私は完璧な冷凍人間になって居たはずだ。山を甘く見た私たちは、雨具を持たず全身びしょ濡れだったからだ。

雪に埋まってかけらも見えない第1キャンプをシェルパに指さされて、ここ掘れワンワン。1メートル下のテントにあったアルファ米を生のまま頬張ってエネルギーを補給する。夜10時、煌々と輝く月に照らされてベースキャンプに着いたときの、隊長の目に光る涙を今も忘れることはない。第2キャンプを出発してから実に38時間、連絡も取れない状況の中で「全員遭難」の恐怖の極地にいた大先輩の心境は思い知れない。ロマンスグレーで格好良かった頭髪が真っ白に見えた。

モンスーンがあけて嘘のように晴れ渡ったベースキャンプは登頂を主張する若手の突撃派と、打ちひしがれた退却派に別れ重たい空気に包まれた。隊長が結論を出す。「よし、若手でラッシュ攻撃をかける。残り全員はそのサポートに当たる」登頂要員の若手は体力温存のため5,000mあたりで高度順化をしていたから彼等の登攀意欲は天を突いていた。ときばきと態勢を整え、第3キャンプに着いた時、彼らは愕然とする。登頂に必要な登山用具や食料、酸素ボンベなどを保管したテントは3メートルもの雪の下、掘り出すのに丸まる二日を要したのだ。キャンプを掘り起こすだけで、体力と精神力を使い果たした頂上攻撃隊は登頂を断念せざるを得なかった。

こうして我々のカンパチェン遠征は幕を閉じた。1973年はモンスーン明けのタイミングが遅れ、他国の遠征隊も登攀中に猛吹雪に襲われていた。10数人も遭難者が出て、ヒマラヤ登山史上最も危険な年になった。「君たちはラッキーだった」と帰国後の報告会で慰められたが、我々の気持は複雑だった。

帰国後、私にとって更に悔しい思い出話がある。第4キャンプを撤退するとき、再びここに登って来るはずだったから、担ぎ上げた当時最新鋭のニコンのカメラ2台と望遠レンズを置いてきたのだ。フィルムを入れて約4キロは6,000mでは重荷だったのだ。

登頂隊の攻撃が断念された時、私はシェルパに「300ドルやるから、第4キャンプに行って俺のカメラを取って来い」と頼んだものだ。だが、答えは「ノー、サーブ(旦那)、命が欲しいから駄目!!!」遠征隊のカメラマンを自ら買って出て、十数万(当時としては大財産)をかけた財産はこうして6,400mに置き去りになった。

年が明けた1974年の5月中旬、ユーゴスラビア隊からカンパチェン初登頂成功のニュースが入った。立教隊と同じ登攀ルートをとったこと、氷の壁に残っていた非常梯子を使わせてもらった、などが記された謝礼の手紙も届いた。我々は複雑な気持だったが、山男の鑑たらんと、彼らの成功を祝福したものだ。

しかし、その手紙に1巻のフィルムが同封されていたのだ。濃霧にかすむジャヌー(7,710m)、世界一難しいジャヌー北壁の初登攀を目指す、成城大学隊から依頼された北壁登攀ルート(当時この方向から撮られた写真は無い)を撮った私の貴重なフィルムだ。

添付された手紙にはこうあった。「貴重な写真と思うので、お送りします。ジャヌー北壁の成功を祈る」私は直ちに隊長に申し入れた。「私のカメラを取り返したい。手紙を書きます」だが、思慮深い隊長はおもむろに言った。「寺島君、君が置いてきたカメラは彼らの物だ。諦めろ」海で放棄された船が発見者の物になるのと同じく、山で放棄した物は発見者の物という掟があるのだ。「写真にはまだ健在のテントが写っているし、食料も装備もまだ残っていた。それを使うのは構わないがカメラは俺のものだ」と地団駄踏んだが山男の掟には従わざるを得なかった。初登頂を逃し、カメラの所在がわかって、私のヒマラヤの悔しい思いは倍になった。



<無一文のアメリカ遊学>

学生時代も卒業してからも「学部は」と聞かれると、いつも私は答えた。「山学部です」と。皆さんは知らないと思うけど、立教山岳部を設立した富山の殿様、堀田家、小原家の御曹司たちは立山のガイドたちを引き連れて日本登山史の黎明期に活躍、北・南アルプスの数々の初登攀をやったのけた。

そして、日本で初めてヒマラヤ登頂に成功したのは立教大学山岳部の堀田隊である。皆さんも誇りに思ってください。1976年、ネパール・ヒマラヤのナンダ・コット峰(6,861m)の初登頂は日本の国民を驚かせ、日本の山岳会はようやくヒマラヤに目を向け始めたのだ。私はナンダ・コットの記録を読んだり、高校のころアルプス縦走でザックと腕に百合のマークをつけた立教山岳部の若武者に何度か会って、その格好良さに憧れ、大学は「立教」と決めていた。私にとっての立教は、学問でなくアルピニストとして、夢の学府だった。

自慢話で恐縮だが1960年の体育会の「新人宣誓の榮譽」は、経済学部経済A組、立教が誇るトップのクラスに編入された私に与えられた。数十人の体育会の猛者を代表して、細身だが真っ黒に日焼けした私は無事に大役をこなした。これは誰にも話していない私の中での秘話中の秘話である。

1964年。無事（山に命を獲られず、の意味です）卒業、東京オリンピックが始まる直前に私はアメリカに渡った。貧乏家庭だったから、渡航資金はもちろん自分で貯めた。当時は、開高健の「何でも見てやろう」等の世界無銭旅行や大学探検部の走り、私も植村直巳もその一人だった。出発前、植村と神田でばったり会いお茶を飲んだ。「俺はアメリカに行って資金を稼ぐつもりだ」という彼に「俺もだ、頑張ろうぜ」といって別れたのが最後になるとは。やがて植村はヨーロッパに渡りそこをベースの冒険活動にはまっていた。私はアルバイトをしながら大学院を目指した。セネター・Hayakawa がまだ San Francisco State College の学長をしていた頃で、サンフランシスコはヒッピーとブラック・パンサーの最盛期だった。大学院は立教の卒業証明書があれば入学できたが、卒業は難しい。私が大学院を目指したのは、学究でも修士課程を取るためでもない。週2-3日、短時間のクラスがあるだけの大学院、残りの時間をアルバイトに使うことができたからだ。

1964年アメリカに着いた直後、労働許可を取るためアダルト・ハイスクールに通うことになる。3人の先生が“優秀な生徒”と認めると週20時間までの労働許可ができることを知った私は、半年間まじめな生徒をやった。クラスは初歩英語文法が中心だったから、オチャノコサイサイ、立教の入学試験を通った英語力は私をして天才と思わせたものだ。20時間もらえれば、40時間働くのは問題ない。私は皿洗いユニオンに潜り込んでサンフランシスコの観光地でも有名な Fisherman's Wharf にある Franciscan Restaurant の NO.1 皿洗いになった。学校は土・日は休みだがレストランは週末が掻き入れ時で休みはくれない。それからの1年間は学校へ8時から3時、皿洗いは4時から12時、休日なしの激務の日々が始まった。週給40時間で64ドルの給料では車を買えず、バスで通した。

冬の夜中、霧の波止場で最終バスを待つ、「辛かったはず」の経験はもう忘れてしまったが、山登りと違った忍耐力をつけてくれたはずだ。

<ペルー・アンデス遠征>

1965年の頃。ネパール政府はヒマラヤ登山を禁止し、山岳部はアンデスにその鋒先をむけていた。目指すはペルー・アンデス。ペルーの東部に位置しアマゾンに近い山塊の科尔ケ・クルス峰だ。隊長は一級先輩の滝口さんだったから、無理にお願いしロスから飛び込み参加させてもらうことができた。

リマからクスコへは、登山装備と食料運搬のためバスに乗る。46年前のペルーの事だ、旧式バスと地方の道路事情は何とも凄まじかった。赤茶色の埃が何処からでも入ってきて、車中の誰もが布で口を覆っていた。5,000mの峠を越える時は高山病に苦しめられる。頭痛と吐き気と腹痛、そして寒かった。二日目の午後小さな村でバスが止まる。その頃までには「俺達、ジャパニーズ」「おー、ハポネス！」なんて片言の会話で、太り気味ではあったが色っぽいセニョリータ達と仲良くなっていたが、バスが止まると彼女の会話は何やら真剣になった。しかし、彼女はスペイン語。何を言っているかわからない。返事が出来ないでいるとやおら、怒って行ってしまった。片言の英語をしゃべる乗客が教えてくれた。「おい、勿体無いな。何で誘いを断るんだ」「いいか、彼女は君を誘ったんだ」「え！バスはここ止まりか？」要は、バスの故障か何かで予定外の1泊。セニョリータは退屈な夜を紛らわすために「一夜の招待」をしてくれたのだ。私はあわててバスから飛び降りると彼女を探したが見当たらず後の祭り。私は誓った、「よし、スペイン語を話せるようになるろ」今、私はスペイン語をペラペラしゃべれます。

科尔ケ・クルス峰は6,111m。鋭い頂を持って山で、現地のケチュア語では「銀の十字架」を意味する。大型トラックに揺られてティンキという牧場に運ばれた。牧場主はスペイン直系の白人で西部劇なみの偉丈夫だ。彼の指示で馬5頭が用意され、馬引きの他に若い牧童がついた。我々はパンパと呼ばれる原野を横切って山の麓に向うが、夕方近く深い谷に下りねばならなかった。ここで騒動が持ち上がる。馬が嫌がって谷に下りないのを言い訳に、ケチュア人の馬引きたちがコカの葉を噛み、涎を垂らしながら、賃上げのストライキを始めたのだ。牧童が脅しをかけて説得しても埒が明かない。

「よし、俺が牧場に帰ってボスに掛け合ってくる」と私。威勢良く牧童の後ろに敷かれたボロ切毛布に飛び乗ったが、すぐに後悔した。



裸馬、しかも、馬のお尻の上、馬が腰を振って歩き、走るたびに来る振動は拷問だった。闇の中のパンパ、牧童の腰にしがみついて痛さとの格闘する姿はご想像いただく他はない。翌朝、コルケ・クルスの右手に鎮座する山塊の主峰アウザンガテにちなんで名づけられた純白の駿馬をあてがわれた私は、ボスを追ってパンパを疾走したものだ。裸馬に3時間揺られてバランスのとおり方を知らぬ間に習得していた私には、高級な鞍と安定した鐙があれば鬼に金棒、もう怖いものはなかった。

ボスの一喝で荷馬隊は前進、ようやく氷河の麓にベースキャンプを設営する。見上げる頂は鋭くそそり立っていて、思わず身震いした。氷河を越え、氷のリッジを攀じ登ってルート開拓を行う。5,500m地点で稜線が2メートルも切れ、覗き込むと紺碧の氷壁、その下は真っ暗だった。まさに奈落だ。「このクレバスは大きすぎる、壁をまこう」稜線の右手は千メートルを一直線に落ちる大氷壁だ。この高度では太陽光は強烈で、昼間表面が解けた雪壁は夜の冷え込みで再び硬く凍る。私は汗にまみれ、ピッケルを叩き込んで氷壁にステップを刻んだ。下を見ると万一の滑落に備えている筈の仲間はコックリ眠りを楽しんでいる。無理もない、この高さで太陽光に当てられれば誰だって睡くなる。だが、待てよ、ここは千メートルを滑り落ちる氷壁だ。そして思った。「これはやばい、撤退だ」そして、その夜の作戦会議で再び稜線突破が決まった。

「クレバスを5メートル程降り、狭まった対岸の氷壁にアイスハーケンを打ち込み、縄梯子をかけて突破する」この戦略は成功だった。格闘すること2時間、クレバスを越えた先には細い稜線が頂上直下の垂直の氷壁に続いていた。再び氷壁にへばりついた我々は交代でステップを刻み高度を稼ぐ。百メートルに及ぶ大氷壁を登りつめるとそこは頂上だった。3時の交信は校歌で始まった。「見よ、見よ、立教、自由の学府～」声は高度でかすれたが心は熱かった。この登頂は今も、コルケ・クルス峰・第2登として世界の登山記録に登録されている。

<ヨーロッパ無銭旅行>

大学院から除名になった私は予定通りメキシコから中米を走ってパナマへ、そこから豪華客船SSキャンペラでヨーロッパに渡った。当時はやった「\$5 A DAY IN EUROPE」というガイドブックを片手に2ヶ月間、ヨーロッパ中を放浪した。5ドルの内訳？移動はユーロパスとヒッチハイクだ。泊まりは1ドルのユースホステル、残りは食事代。普段はフランスパンと10セントのコーク、3日に一度中華料理店に入りスープと炒飯で栄養(?)をとったものだ。

このヨーロッパ大陸放浪のハイライトはスイス・アルプス、マッターホルン(4,478m)登攀だ。ツエルマットの村でピッケル造りの名人「ベント」の工房を訪ねる。「若いの、知ってるだろ。俺んとは注文を貰ってから造る。飛び入りはむりだ」一端断られた私は翌日も足を運び「私は立教山岳部、世界で初めてヒマラヤを登った伝統ある山岳部だ。明日マッターホルンに登るのにどうしてもピッケルがいる。頼むよー」と泣きついた。山男は山男を知っている。「シヨガねえな持ってけ」正統派ベントの輝くばかりの新品だった。「お前の名前は？」このピッケルには番号がついていて持ち主が記録される。彼等の資料には私の名前が今でも残っているはずだ。

山の肩にある小屋には10人近くのアルピニストが泊まっていた、ガイドが話しかけてきた。「70ドル出せば連れて行ってやるぞ」夏とはいえマッターホルン登攀は難度が高くガイドなしは危険なことは知っていたが、私にとっての70ドルは15日分の飯を意味する。「No Thank You. I am Rikkio Alpine Club」。No Moneyとは言えなかった。朝3時、ガイドを雇えない日英米の3人はガイドたちの電燈を追って小屋を出た。ザイルやビバーク用具を担いだイギリス人は重荷のため遅れ始める。ウインドブレーカー一枚のアメリカの若造は身軽だから3人のペースはかみ合わない。私はイギリス人からザイルを取り上げるとアメリカ人に渡した。登ること2時間ようやく明るくなったが岩稜は凍るほど冷たい。遅れたイギリス人に断りを入れて我々は先を急いだ。

ガイド組みは堅調で行く手も見えない。岩についた足跡を頼りに登攀を続けること8時間、いよいよ難関の垂直な壁にぶつかった。初登頂をしたイギリスのウインパー達が登頂成功後、足を踏み外し何人が墜落死をした難所である。ここには太い鉄の鎖が貼り付けられていて、強引に攀じ登る。高度は4,000mを越え、アメリカ人の足元が危なくなった。5-6級の登攀技術を自慢していたが、岩登り技術は高山病に勝てない。最後の登攀は雪の稜線だった。頂上は雪に覆われ、4畳半くらいの狭さで、足場は危なっかしかったが景観は雄大そのものだ。「やった！マッターホルン、単独登頂だ！」頂上に建てられた十字架のそばに立って、360度の眺めの感激に浸った。

だが、私には厄介な連れがいたのを忘れていた。PALは、青い顔をして青息吐息、ヤツケのポケットから乾し葡萄を摘まんだが、すぐに吐き出してしまった。「水をくれ！」この野郎と思ったが、水を飲ませ元気づけた。ここで問題発生。いざ下降になってPALがしり込みし始めたのだ。

山でも階段でも「登るは易し、下るは難し」なのは皆さんもご存知。転落はいつだって下山時に起こる。雪稜は約300メートルの距離だ、ここでイギリス人のロープが役に立った。私はアイゼンを付け、足元が安定するのを見届けた上で、PALにピッケルを貸し、ザイルのピッチ30メートル一杯降ろしてから今度は私が下る。尺取虫下降を10数回繰り返すと今度は岸壁の下りだ。再び、イギリス人のロープを利用してPALを下ろす作業に専念した。「何だ！？俺がガイドしている。70ドル払え」と言いたかったが半病人が相手では「しゃんめえ」だ。

そこで、新しい仲間と登ってきたイギリス人と再会する。彼は重い荷物と急峻な登攀で息が切れていた。「頂上はもう近い、頑張れ。ところで、ザイルを返そうか？」答えは「No. You Take Back to The Hut, Please」プリーズが付くとはイギリス人はいつも紳士だと思った。小屋に着いたのは夕方6時、なんと15時間の長丁場だった。小雪が降り始め私はイギリス人の安否を祈った。彼らはその夜は鎖場近くでビバーク(不時露営)、翌日も結局頂上に登れなかった。アメリカのPALは私にガイド料は払わなかったが晩飯代は払った。「お前は命の恩人だ。一生忘れない」なんて言っていたけど、彼にとってその位のインパクトがあったマッターホルンに違いないことは確かだ。

その後ユングフラウ、メンヒ、ブライトホルンを征服し、いよいよアルプス最高峰のモンブランを目指してフランスのシャモニーに入った。然し、雨は3日間降り続き、晴れる様子はなかった。日本への出港日が迫ったためモンブランを断念した私は一路マルセイユに向かった。

<マルセイユ～横浜、55日間の船旅>

今や日本人建築設計家として世界最高の評価を受ける安藤忠雄と出会ったこの船旅はエキサイティングだった。彼は大学に行けず独学で建築を学んだ。生活費を稼ぐためにプロボクサーにもなった。とにかく彼は何でもやって、何でも見る。その経験が生きて世界建築界の最先端を走っているのだ。1968年、安藤は全日本建築コンペで優勝、ヨーロッパ1周のチケットを手に入れた。私と同じ年、今も若い発想の持ち主だが、初めて会った時から「凄い奴がいるものだ」と感心した。感心その1、チェ・ゲバラに心酔し、当時はやった「毛沢東語録」をそらんじていた。その2、アメリカ遊学で能天気な私には聞いたこともない「弁証法」なんて訳のわからない理論を論じた。

その3、「こいつは物凄いインテリだなー」と思っていると、茶目っ気も多いに披露する。街角の若い娘に近寄ると小型カメラをミニスカートの下に入れてシャッターを押したり、ある日の夕方、ホテルに帰ると我がベッドで船員が“情事”の真っ最中。当時のマルセイユは航海船舶でゴったがえし、ショートタイムの売春婦に部屋を又貸しするなんて当たり前の時代だ。安藤がカメラを持ち出して大騒動になった。カメラを向けられた水兵が「xxxx?????!?!?!」真っ赤になって怒ったが、我が友は平然として言ったものだ。「ええやないか、この部屋ただで使わしたるわ、さあ、もっとやれ！」その後の顛末はご想像に任せる。「おりゃ、元4回戦ボーイだ、あんなの一人で仕留めてみせる」と笑い飛ばす安藤はやることなすことが桁違いなのだ。当時はスエズ運河が戦争中で通れず、南アフリカのケープタウンを回っての大航海だった。ファーストクラスの特別室を与えられた安藤は、我々が居る二等船室に移り住んだ。「一等って、面白くないわ」がその理由だ。横浜まで55日間、セネガル、ダーバン、ボンベイ、セイロン、フィリピン、バンコック、香港、神戸。紺碧の大海原と安藤忠雄が行く先々に旋風を巻き上げた記憶は今も鮮明。彼と他の世界放浪者達との稀有な体験だけでも小説が書ける。願わくばこのエピソードが彼の信奉者の目に触れないことを望もう。安藤？彼なら「もっと面白く書けんかい！」って、はっぱをかけてくるはずだ。

この「私の履歴書」を執筆中、なんと、日経新聞のオリジナル「私の履歴書」に安藤忠雄が書き始めたので、このタイミングにびっくり！です。彼の回想の中に、この船旅の話が必ず出て来ること間違いなし。安藤にとってもそれほどインパクトがある航海だったはずだ。

私はこうしてアメリカ遊学、アンデス登頂、ヨーロッパ貧困旅行、横浜を出たのが1964年9月2日、戻ったのも9月2日、世界の海と大陸を放浪し4年振りに日本に戻った。そして、私を待っていたのは、自分でも想像できない波乱と万丈だった。

この「私の履歴書」を書き終えた直後、NHKの「Great Summitsへの招待」という番組で、日本人のヒマラヤ初登頂の立教隊、堀田君というナレーションと共にかっこいい登頂の映像が放映されました。私も初めて見る映像は白黒で迫力満点、感激ものでした。

次号、「後編」、私の「座右の銘」「細心にして大胆なれ」を地で行く物語に、乞うご期待です。

LA 立教会活動報告

「Italian Fusion のお料理教室と Wine を楽しむ会に参加して」

LA立教会 TOWN&GOWN
ターナー土門寛子さん
(2000 年英米文卒)



LA 立教会のイベントに参加するのは今回が 2 度目だったので(1 度目は 2 年前の音楽会でした)、皆様の輪の中に入れていけるか、初めは少々不安でもありました。

午前 11 時半集合ということでしたので、少々早めに 11 時ちょっと過ぎには会場リトル東京 TERAMACHI コンドミニウムに到着しました。

日時: 11 月 14 日(日) 11 時半-3 時半
場所: リトル東京
TERAMACHI コンドミニウム内コミュニティールーム

料理講師: 坂田朝洋さん (1981 年、経済学部卒)
ソムリエ: 谷上知美さん (1996 年、法学部卒)

「少し早く来すぎたかな」と内心思っておりましたが、本日のシェフ坂田朝洋さんを初め、既に数名の先輩方が料理の下ごしらえを始めていらっしゃいました。皆さん、朝 9 時から会場入りして準備をされていたようです。私も諸先輩方に混じり、足を引っ張らぬよう気を付けつつ、お料理のお手伝いを開始いたしました。

出席者は以下 15 名の皆様でした。(敬称略)
大角夫妻、岡本夫妻・息女、孫、武井、麻田、市川、渡邊、柿本、谷上、坂田、Alonso、Turner

今回のメニューは、シュリンプのウニクリームソース/ダンジネスクラブの Pasta/オレゴン産ラムチョップソテー、グリーンサラダ添えという何とも豪華な 3 品のコース。
会費は一人 \$ 38.00。内容は以下の通りでした。

ワイン(白赤-イタリアとナパ 2 種類ずつ)
お料理 3 種
デザート、コーヒー、紅茶、日本茶

坂田さんの御好意により、ウニのクリームソースは、通常坂田さんが同一品を作る際に使用する量の約 3 倍を使用。ダンジネスクラブは、生きている蟹をその場で調理し、身だけでなく蟹ミソまで余す所なくパスタソースに使用した上に、更にスノウクラブの身を投入。ラムも坂田さんが業者を利用し、新鮮な物を取り寄せてくださいました。

午後 1 時半よりワインのテイastingとお食事会へと移りました。ワインの選出をしてくださった谷上知美さんは、マスターソムリエの先生に付き、ワインの勉強をされているそうです。イタリア産の高級ワインと、カリフォルニアの Napa Valley 産の白と赤のワインをそれぞれ御用意くださったので、計 4 種のワインをお料理に合わせながら飲み比べることが出来ました。

レストランでは決して味わう事の出来ない最高級の食材を使用したお料理と 4 種類のワインの組み合わせは、本当に美味しく、贅沢そのものでした。その後、デザートも頂き、アットホームな雰囲気の中、初め私を感じていた不安は全くなり、皆様との楽しいひと時を過ごす事が出来ました。

会場の手配をしてくださった大角さん、全ての料理を 15 人分手配された坂田さん、美味しいワインを選んでくださった谷上さん、そして、朝早くから下ごしらえや会場準備のためにいらっしゃった孫さん、柿本さん、渡辺さん、市川さん本当にありがとうございました。

海外立教会から「バンコク立教会の紹介」



バンコク立教会会長
山西陽三さん (1977 年法卒)



副会長
西島りえ子さん (1993 年社会卒)

バンコク立教会は、2004 年に設立され今年で7年目となる比較的新しい海外校友会です。2010 年末時点で、男性会員 49 名、女性会員 13 名、合計 62 名の会員数となっております。

会員は、日本の企業から派遣された駐在員および帯同家族の人が多いのですが、現地で結婚された人、国際機関でお勤めの人、韓国入教留学生ご夫婦、現地企業でお勤めの人などさまざまな会員の方がおられます。バンコクは経済発展が目覚ましい ASEAN 地域でも日系進出企業が 1,000 社を超える国際都市ですので、在留邦人も推定 5 万人以上といわれています。そんな、多数の日本人が暮らすバンコクで、それぞれの青春時代を池袋で過ごした色々な世代の立教 OB 達が集う楽しい会が我がバンコク立教会です。

会の活動方針としては、バンコクでの海外生活を有意義に楽しく過ごすため、しがらみにとらわれず、会員の誰でもが気軽に参加できて、皆の憩いの場となれる様な集まりの会を目指しております。主な活動としては、定期総会、クリスマス会、明治大学と上智大学とのゴルフ対抗戦、ゴルフコンペ、レディースランチ会等ですが、その他、不定期に食事会や飲み会も行なっています。

また、立教大学から出張でバンコクに来られる先生方や校友会の方たちとの食事会も随時行なっています。昨年は、白石副総長が来タイされ、会員メンバーと最近の立教大学の情報やタイでの生活事情などの話題で楽しく歓談しました。最近では、会員の奥様方や子供たちの参加も増えてきましたので、これからも家族でエンジョイできる会になればと思っています。

タイ国は、世界有数のビーチリゾートなど豊かな自然に恵まれ、歴史的な観光資源や美味しいタイ料理などもあり、また、諸物価もリーズナブルですので、私たち日本人にとっては大変暮らしやすい国だと思います。LA からは、はるか遠く離れていますが、機会がありましたら是非当地にお越し下さい。LA 立教会の皆様のお来タイを心よりお待ちしております。

バンコク立教会 Ladies より

LA 立教会のみなさま、こんにちは。1993 年社会学部卒の西島りえ子と申します。

バンコク立教会の設立時、当時在タイされていた先輩女性の呼びかけで、レディースランチ会が開かれ、かれこれ 7 年。

当時のメンバーはほとんど本帰国されましたが、メンバーが変わってもランチ会は受け継がれて今日に至ります。

活気あふれる街バンコクで、多方面においてエネルギーに活躍する女性校友・校友の奥様が集うランチ会のひとは、大変有意義かつ魅力的で、それぞれのバンコク生活に大いなる刺激となっています。

また、食の都でもあるバンコクでは、世界中の料理を気軽に楽しめます。「立教女子」の目と舌を満足させるレストラン選びも楽しみの一つです。今後は Facebook などでバンコク立教会 Ladies おすすめのレストラン情報を掲載していければと考えています。

遠く離れた LA のレディースの皆様、この機会にバンコク立教会をどうぞよろしく願いいたします。

会長からのメッセージ「会員同志のもっとコミュニケーション」を目指して

LA 立教会会長 武井誠之さん(1969 年経済卒)

2011 年早くも 3 月に突入し、日本では卒業式のシーズンを迎えようとしております。

さて、冒頭から誠に恐縮でございますが、お知らせしたいことがあります。

既に昨年夏メールにて、配信いたしました。元会長水谷重男さん(1955 年卒)が、7 月 20 日未明にホワイトメモリアルホスピタルでお亡くなりになりました。享年 77 歳でした。そして、8 月 27 日に岸野豊牧師(1975 年卒)の教会にて、有志による「故人を偲ぶ会」を催しました。ここで改めて、水谷さんのご冥福をお祈り申し上げます。

さて、今年は LA 立教会、創立満 50 周年となる記念すべき年であります。昨年末に、ニュースレター編集担当の、坂本さん、佐野さん、武田さんから会員の皆様に「アンケート」をお送りして、各々ご回答をお寄せ頂く方式でお願いいたしております。

私としましては、前号でもふれましたが、会員全員参加だけでなく、以前 LA におられて、日本へ帰国された元会員の方々にも連絡可能な限り、メッセージを頂けたらと考えております。

今年のテーマでもあります「会員同志のもっとコミュニケーション」を現実のものにしていくには、皆様一人一人のご協力とご理解を抜きにしては、達成できません。

我々 LA 立教会は、上は昭和 26 年(1951 年)卒の山越さんから、下は平成 18 年(2006 年)卒の FENG さんまで、年齢差実に 45 年、まさに半世紀近い開きのある校友会組織となっております。

近頃はインターネットの普及により、瞬時に情報を伝達することができます。しかも、昼夜の別なくです。そのお陰で、「別に会わなくても連絡が取れる」という、様々な弊害も生じてきており、インターネット社会も「両刃の剣」となってきました。

そこで一つ提案ですが、パソコンに頼らず、たまには電話、もしくは直接会いに行くことも大変重要なコミュニケーションの手段だと思いませんか。日本におられるご両親や、お友達に電話をしておりますか？

かく言う私も先日、驚きというか、悲しい体験をいたしました。以下ご披露いたします。(右上に続く)

(左下から続く)会員で私と同期(1969 年卒)で、パームスプリングスで寿司屋を営んでいる阿部孝之さんが、2 年前(2009 年 11 月 29 日)に、大腸癌で亡くなっておられることが、奥様との電話で判明いたしました。享年 62 歳でした。

このことをお知らせした、アメラグの先輩、水上徳弘(1968 年卒)さんから頂いた、阿部さんへの「はなむけの言葉」を添えて追悼の意を表したいと思えます。

「知らせをきいて、、なんと、申してよいやら、、、この訃報チト、早い、'幕引き'、のような気もするが、、

孝之君、、学生の頃から 束縛を嫌い、干渉を嫌い、冒険心の旺盛な、独立独歩の '道' を歩もうとする反骨、気概の '男' だったが、、、、まだまだ、、 若年、、惜しい、、

あの当時の、、ハシリで、、、、若いころは、自転車で、全国を回ったり、奇抜なことを、しでかす特異な "進取の冒険マン" だったりもしたが、、左様に、、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、パームスプリングスの彼の '歩み' も又 延長線上、なんでも、やってみよう、'精神'、、恐れぬ冒険男の真骨頂だったと思う」

更にもう一件、アメ研の大先輩、サンタバーバラに在住されていた Gibney 弘子さん(1962 年卒)が、1 月 7 日朝、亡くなられていたことが、笠井さんが電話をされたことで、ご遺族より判明いたしました。

この様に、期せずして 2 件の不幸な知らせでしたが、偶然にも電話をしたことにより、会員だった人の消息をつかむことができました。ここに改めて、お二人のご冥福をお祈り申し上げます。会長のメッセージといたします。

合掌

—編集部より—

編集部からの御礼とお知らせです。

LA 立教会会員の皆様、
先般お送りいたしました
「もっとコミュニケーション」アンケートに
ご協力いただきまして、ありがとうございました。

次号では、アンケートの内容から、
皆様の「知られざる素顔」をどんどんご紹介。
会員同士のコミュニケーションの
きっかけになればと考えております。

まだアンケートをお出しただけてない方が
いらっしやいましたら、
今でもぜんぜん遅くありません。
ぜひご協力お願いいたします。

LA 立教会 今後の行事予定

3月26日(土)
LA 立教会第50回総会
Little Tokyo Teramachi Homes
Community Room にて

5月下旬
交換留学生送別会
日時・会場：未定

6月中旬
南加大学対抗ゴルフトーナメント
詳細：未定

LA 立教会 副会長 坂本計洋(1977年経済卒) dblue23@gmail.com

私の今号でのお役目は、僭越ながらスーパーバイザーみたいな立場だったのですが、自分が実際にクレジットを頂けるとしたら、表題のデザインと、大学、海外支部関係の記事収集と対談インタビューのセットアップのみでして、後は全て、佐野さんと武田さんが中心になって製作されたものです。お二人に大きな拍手を贈りたいと思います。これからは、立大から、最低でも毎年2人の交換留学生在が CSU San Marcos へやって来るようになっておりますので、今回試みた対談インタビューのような形で、世代を越えたコミュニケーションの1つのステージとなるニュースレターに出来たら素晴らしいと思います。

武田 整(1989年経済卒) ttakeda@kpaccoldstorage.com

10月に佐野さんとMalaga Cove Deliで打ち合わせして会員同士がもっと話し合えるきっかけ作りに繋がればというテーマで始めた今回のNL。

私自身も今回の取材で今まで知らなかった会員の方を知ることができました。次号では皆さんの自己紹介文を紹介させていただきますのでたくさんの方の参加をお待ちしています。

Malaga Cove Deli の評判の Cheese Burger お試しあれ。

佐野尚吾(1988年史学卒) shogo@c-2k.com

初めてニュースレターの編集をさせていただきました。本当に楽しい経験でした。編集を通してたくさんの方のわくわくするようなお話を聞けて、いろんな方にお会いすることができました。寺島さんのお話は、まるで大河ドラマを見ているかのように、壮大でダイナミックでした。土屋あきのさんと現役の立教生二人の対談は、あきのさんの素敵な人柄と才能あふれるトーク、現役立教生の若さ溢れるリアクションで、時間の経つのを忘れしました。坂本さんにニュースレター制作には大変ご尽力いただきました。武田さんは一緒に編集作業をして、本当に頼りになるパートナーでした。このニュースレターをきっかけに、皆様が少しでも LA 立教会に興味をもっていただき、立教校友同士のコミュニケーションの機会作りになればと祈念しております。